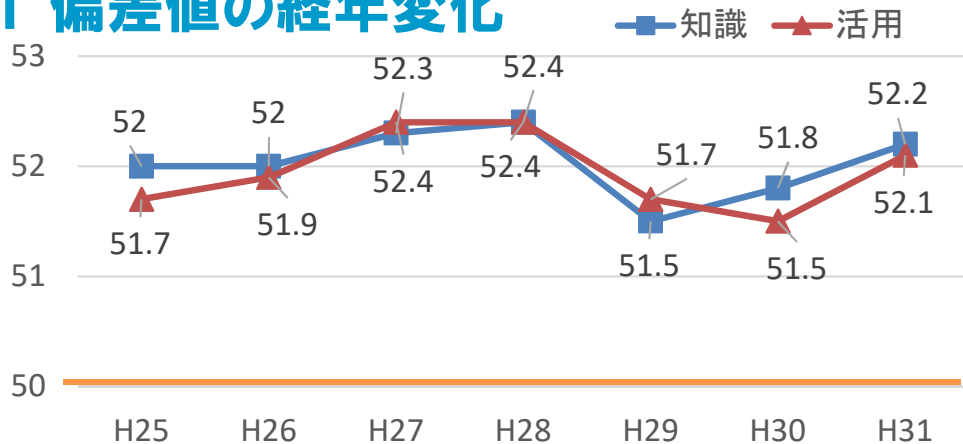


結果のポイント

1 偏差値の経年変化



- H30から知識が0.4P、活用が0.6P伸びた。
- 知識・活用ともに偏差値52を上回った。

2 領域別の結果

領域	正答率	目標値	偏差値
数と計算	76.4	71.8	52.0
量と測定	69.6	66.7	51.2
図形	60.5	56.3	53.0
数量関係	58.4	54.2	51.9

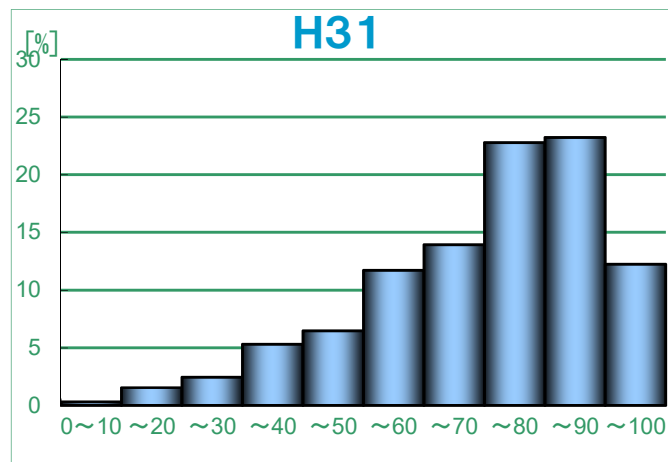
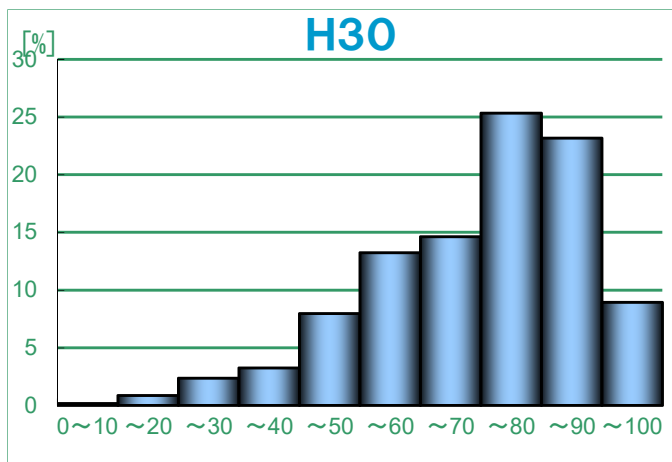
- 全ての領域で偏差値50を上回り、全国平均以上の定着が図られている。
- H30では「量と測定」領域で目標値を下回ったが、H31では、全ての領域で目標値を上回った。

3 観点別の結果

観点	正答率	目標値	偏差値
数学的な考え方	59.6	56.6	52.0
数量や図形についての技能	72.6	69.0	52.1
数量や図形についての知識・理解	71.1	66.1	52.6

- 全ての観点において偏差値50を上回っている。
- 全ての観点の偏差値がH30から0.4~0.5P伸びた。
- 低学力層の児童の割合(正答率30%以下)が昨年度同様少ない。
- H30は正答率71~80の層が最も多かったが、H31は正答率81~90の層が最も多くなっている。

4 正答率度数分布の変化



課題が見られた問題と指導の改善

1 正答率が低かった問題

大問17(2) (正答率15.9%・目標値30.0%)
 平行四辺形の特徴を使って2つの道のりが等しくなる理由を説明する問題
 ▲問題解決の方法やその手順を数学的な表現を用いて説明する力が身に付いていない。

指導の改善

- 図形を構成する要素である辺の平行や垂直関係に着目し、平行四辺形、ひし形、台形の性質を見だし、図形の構成の仕方について考えられるように指導する。
- 児童が「筋道を立てて考え、理由を説明できるようになる」ため、日頃の授業で、「説明の基本形」等を利用して説明させるなどして、論理的な説明の組み立てに慣れさせる。

＜説明の基本形を利用した例＞

- | |
|--|
| ①辺ABと辺BCを合わせた長さ、
辺ADと辺DCを合わせた長さを比較します。 |
| ②平行四辺形の向かい合った2組の辺の長さはそれぞれ等しいので、ABとDC、BCとADの長さは等しくなります。これらのことから、AB+BCの長さと、AD+DCの長さは等しくなります。 |
| ③だから、辺ABと辺BCを合わせた長さ、辺ADと辺DCを合わせた長さは等しくなります。 |

2 無解答率が高かった問題

大問18(3) (正答率22.4%・無解答率23.0%)
 折れ線グラフと棒グラフを読み取り、それを根拠に理由を説明する問題
 ▲それぞれのグラフから見いだせる傾向や特徴についての理由を説明する力が身に付いていない。

指導の改善

- 複数の数量が表されているグラフにおいて、それぞれのグラフが何を表しているかの把握をさせる。
 - 一方のグラフだけで判断させず、折れ線グラフと棒グラフの両方を用い、増減等について順序よく考えさせる。
 - 児童が「筋道を立てて考え、理由を説明できるようになる」ために、論理的な説明の組み立てに慣れさせる。
- ＜説明の基本形を利用した例＞

- | |
|---|
| ①前の日と比べて売り上げが増えたときと売れたパンの数の増減についての比較をします。 |
| ②前の日と比べて売り上げが増えたのは、月曜日から火曜日、水曜日から木曜日、木曜日から金曜日、金曜日から土曜日です。売れたパンの数は、水曜日から木曜日、木曜日から金曜日、金曜日から土曜日については増えているが月曜日から火曜日については減っています。 |
| ③だから、前の日と比べて売り上げが増えたとき、売れたパンの数が必ず増えるというのは間違いです。 |